

DOWA

2005

ENVIRONMENTAL REPORT

DOWAだからできること、

子どもたちのためにできること



「大好きな場所を大切に想う気持ち」 そんな子どもたちの心を実現するために…

「大切な場所、守り続けたい環境」。

そんなテーマで、子どもたちに絵を描いてもらいました。

いつも散歩している道や公園で出会う花や緑。

大好きな海や山で発見した動物、昆虫、魚…。

子どもたちにとって、日常生活を取り囲む

すべての自然が、生き物が、まるで宝石のように

まぶしくここに描かれています。

●
そんな子どもたちの宝物を、大切に守り続けられるように…。

同和鉱業グループは、環境ビジネスや環境保全活動を通じて

今日も、社会に貢献し続けています。



ごあいさつ

DOWAにしかできないことを もっと、これからの環境事業に。

■素材を熟知するプロだからこそその高度な資源循環

目覚ましい発展を遂げた現代社会は、一方で、地球温暖化、環境汚染、資源の枯渇などの様々な環境問題を抱えています。最近では循環型社会構築の必要性が認識され、様々な取り組みが積極的に進められるようになりました。しかしながら、こうした取り組みの中には、ある部分だけで最適でも全体で見ると大きな負荷を地球にかけているものもあるなど、飛躍的改善につながる社会システムにまでは至っていないように思えます。

当社は、120年以上にわたり鉱山・製錬業を営んでまいりました。素材を扱う会社としての使命のひとつは、「素材を知っているものだからこそできる高度な資源循環を社会に提供すること」だと考えております。そして、未来の世代に引き継ぐ持続可能な社会の構築に向けて貢献したいと思います。

■環境保全の取り組みと環境・リサイクルビジネス

当社では、環境負荷を低減し、循環型社会づくりを進めるため、グループの行動規準である「地球環境の保全に配慮し、資源の有効活用とリサイクルを進める」ことを念頭に、2001年に環境基本方針の基本理念・行動指針を制定し、環境保全活動に取り組んでまいりました。

自社の生産活動から生じる環境負荷の低減努力に加え、120年以上にわたり培われてきた鉱山・製錬業の技術を駆使し、環境リサイクル事業をコアビジネスのひとつとして積極的に推進しております。

例えば、廃棄物の収集・運搬、中間処理から管理型の最終処理までの一貫した環境関連サービスや、廃電子基板などからの貴金属リサイクル、家電リサイクル、自動車シュレッダーダスト(ASR)からの有価金属や蒸気の回収、さらには土壌の浄化といった事業を展開し、環境ビジネスにおける日本のリーディングカンパニーとして同和鉱業ならではの役割を果たしております。

こうして、他社に先駆けて取り組んできました当社の環境事業は、

代表取締役社長・CEO

吉川 廣和



皆様の生活における縁の下の力としてお役に立てているものと自負しております。

また、自社の生産活動におきましても、水力発電電力の利用、モーダルシフトの促進などによる温室効果ガス排出削減や、製造プロセスの見直しによる排水量の減少や工程内での排水の再利用による水質汚濁防止への取り組みなどを推進しております。

2004年度には、当社で2基目となる自動車シュレッダーダスト処理設備を稼働させることで、循環型社会づくりを、さらに一步前進させました。また、猛スピードで経済発展を続ける中国におきまして、日系企業として初の貴金属リサイクル工場を設立し、操業を開始いたしました。今後は日本国内のみならず、世界的に広がる環境への配慮を重視し、グローバルな視点から環境リスクの管理やリサイクルを始めとした環境保全活動にも、積極的に取り組んでいく所存です。

さらに、研究部門におきましては、環境技術研究所を強化し、難処理廃棄物の処理などの技術開発を進めております。また、東北大学大学院環境科学研究科との包括的研究協力協定を締結し、産学共同による環境問題への取り組みを進めてまいります。

一方で、排水の漏出事故を発生させ、多くの方々にご迷惑をお掛けしてしまいましたが、操業を自主的に停止し、様々な角度から再発防止対策を講じました。今後もグループ一丸となり安全の確保と環境保全活動に取り組んでまいります。

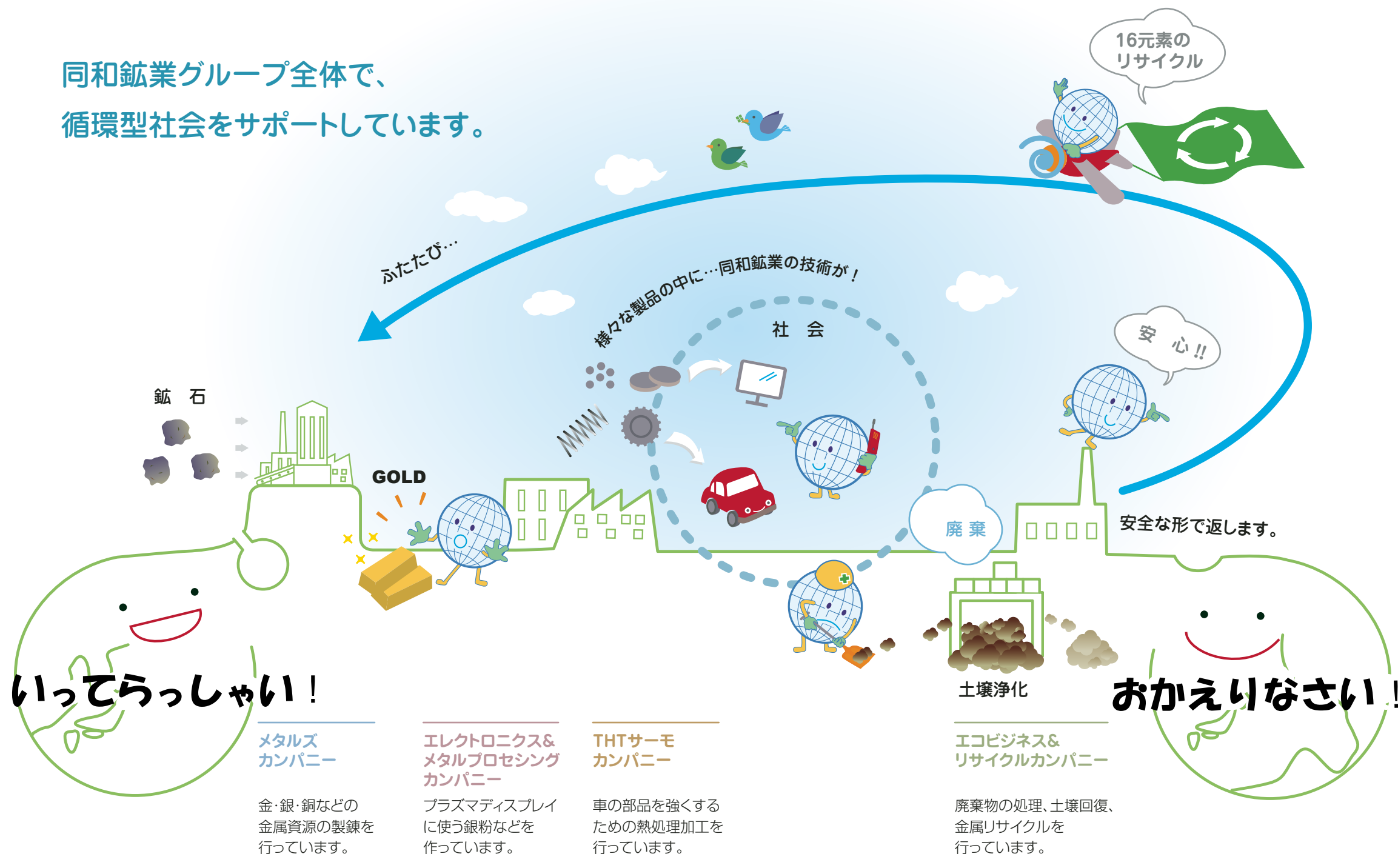
■環境報告書をお読みくださる皆様へ

この度、発行いたします「環境報告書2005」では、当社グループの環境保全活動、循環型社会における役割、環境負荷の実態、および負荷低減のための取り組みなどを、できるだけわかり易くまとめるよう努めました。

広く皆様のご理解をいただきますとともに、是非とも忌憚のないご意見をお聞かせ願えれば幸いです。

DOWAって、こんな会社です。

同和鉱業グループ全体で、
循環型社会をサポートしています。



メタルズカンパニー

金・銀・銅などの
金属資源の製錬を
行っています。

エレクトロニクス& メタルプロセッシング カンパニー

プラズマディスプレイ
に使う銀粉などを
作っています。

THTサーモ カンパニー

車の部品を強くする
ための熱処理加工を
行っています。

エコビジネス& リサイクルカンパニー

廃棄物の処理、土壌回復、
金属リサイクルを
行っています。

編集方針

本報告書では、当社の事業活動にともなう環境影響について正確な情報開示に努め、また図表などを用い

わかりやすい体裁を心がけました。

■対象組織

同和鉱業の直轄工場/事業所およびグループ各社
○対象事業所の選択理由：原則として、連結対象で従業員50名以上の事業所
および会社を報告対象として選定しました。ただし、同和鉱業本社およびイー
アンド・イー・ソリューションズについては、ユーティリティや廃棄物量の正確な
把握が困難であることから、それぞれの業務上で環境負荷が大きいと考えら
れる電力消費量のみを集計しました。

■対象とする読者

顧客、株主・投資家、ビジネスパート
ナー、社員とその家族、行政、地域・
社会の皆様を大切なステークホル
ダーと考え、本報告書の主な読者と
想定しました。

■対象分野

同和鉱業グループの事業活動
および環境保全活動について

■対象期間

2004年度
(2004年4月1日～2005年3月31日)

■ガイドラインへの準拠

本報告書は環境省「環境報告書ガイドライン(2003年度版)」
を参考としています。

■今後の方針/ご意見の募集ほか

アンケートを同封しております。皆様の忌憚のない
ご意見・ご感想をお寄せください。

Contents 目次

●ごあいさつ	01
●DOWAとは?	03
●目次	04
●組織とビジョン	05
○環境基本方針	05
○同和鉱業グループ 環境への取り組み	06
未来への架け橋「2004環境プロジェクト」	
○最終処理施設グリーンフィル小坂	07
○中国金属リサイクル湿式処理工場	08
○シュレッダーダストリサイクル設備	09
○希少金属インジウムの回収強化	10
○土壌浄化用新型鉄粉E-401の開発	11
○カドミレス黄銅棒の商品化	11
○超省エネ型熱処理炉の開発	12
○東北大学環境科学研究所との包括的研究協力協定締結	12
●座談会	13
●同和鉱業グループの社会・環境貢献	15
○環境事業による社会・環境貢献	15
○地球温暖化問題への貢献	16
環境報告2005	
●目標と実績	17
●同和鉱業の事業活動と環境影響	18
●環境パフォーマンス	19
○用水 ○エネルギー	19
○地球温暖化防止	20
○廃棄物	21
○リサイクルの推進	22
○大気汚染の防止 ○水質汚濁の防止	23
○化学物質の管理	24
●環境管理システム	25
○環境管理体制・組織	25
○ISO14001承認取得	25
○環境監査 ○環境教育	26
○安全に対する取り組み	27
○環境情報開示/情報発信	28
○苦情などへの対応	28
●環境コミュニケーション	29
○地域コミュニケーション	29
●環境会計	31
○環境会計 ○グリーン購入など	31
○EEBE®	32
サイトレポート	
○小坂製錬	33
○秋田製錬	33
○岡山クリーンワークス	34
○日本パール	34
○同和鉱業 岡山工場	35
○同和メタル	35
○THTサーモ 中京工場	36
○THTサーモ 浜松工場	36
●会社概要	37
●主な事業・製品	38
●同和鉱業環境・社会活動の歴史	39
●基本要件・ガイドライン対照表	40

いまを快適に、未来を美しく…

環境基本方針

企業理念と環境保全活動

私たちは、会社が『社会の公器』であるという認識に立ち、単なる法令遵守にとどまらず、製品の安全、環境の保全、不正の排除、透明性の確保を含めた“企業としての社会的責任”を果たすように日々努力しています。

私たちは、次のような企業理念と行動指針に基づき、社内と社会の環境保全／環境リスク管理活動に取り組んでいます。

■ 基本理念

同和鉱業は、企業理念である「当社は地球を舞台に内外の経営資源を駆使して人類の快適な暮らしを創造する」を環境保全活動の基本とし、また「地球環境の保全に配慮し、資源の有効活用とリサイクルを進める」を環境に関する行動規準とする。

同和鉱業は、企業活動と環境との調和をはかりつつ、地球環境への負担を低減し、地球的規模での持続的発展が可能な社会の実現に貢献する。

同和鉱業の環境保全活動は、以下の通りとする。

- ① 当社の事業活動における公害防止、省資源、環境負荷の低減などの活動
- ② 社会の環境リスク低減に貢献するための活動

■ 行動指針

- ① 環境負荷の継続的な低減およびゼロエミッションを推進するために、全社、各部門、ならびに関係会社ごとに環境目的・目標を設定し、環境管理システムを構築する。
- ② 事業活動にかかわる環境側面（大気、水質、土壌、廃棄物など）をつねに認識し、環境負荷低減に取り組むとともに、定期的に環境目的、目標の見直しおよび環境監査を実施する。
- ③ 事業活動、製品、サービスにかかわる環境関連法規、規則、協定などの遵守に努め、環境の保全と向上をはかる。
- ④ 当社の環境・製錬施設を通じて、廃棄物、土壌汚染など社会の環境リスク低減に努めるとともに、金属のリサイクル、エネルギーの回収およびクリーンエネルギーの利用を実施し、環境保全、省エネルギー、省資源、ゼロエミッションなどに貢献する。
- ⑤ 従業員の環境への意識向上をはかり、また環境保全活動を通じて地域社会との調和をはかる。

2001年1月1日
同和鉱業株式会社

同和鉱業グループ 環境への取り組み

同和鉱業グループは『自社の事業活動における環境負荷の低減』と『事業・製品・サービスを通じての社会のリスク低減』を両輪として環境経営を行っています。様々な環境分野における、同和鉱業グループの取り組みを下図に示します。



同和鉱業だからこそ可能な、独自の技術とノウハウを駆使し、

私たちは、環境問題の様々な側面に、積極果敢に挑戦し続けています。

「今日の基盤を着実に築き、明日の飛躍と拡大を実現する」＝「Charge&Expansion」。

このスローガンの下、私たちは、グループ一丸となって事業構造改革Ⅱを推進しています。

その活動の一例である「2004年環境プロジェクト」を、次頁より紹介します。





国内最大級

最終処理施設グリーンフィル 小坂

同和鉱業は、2004年12月、小坂製錬所（秋田県鹿角郡小坂町）内に新規の管理型最終処理施設を建設しました。当社グループでは既に、秋田県大館市に埋立容量200万m³の管理型最終処理施設を有しており、今回の「グリーンフィル小坂」は、2つ目の最終処理施設になります。いまや全国的に最終処理施設の受入余力が不安視される中で、総埋立容量270万m³を誇るこの施設の建設により、収集運搬から最終処理までの一貫処理という当社の特長は、さらに強化されることとなります。「グリーンフィル 小坂」には、粘性土や合成ゴムシートなどによる遮水構造、漏水検知システムなど、安全面で最新の技術が採用され、地元の皆様により信頼・愛される施設となっています。ちなみに「グリーンフィル」の名称は、社内公募で決定したもので、緑=環境を愛する思いが込められています。

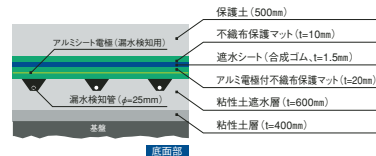


小坂製錬
リサイクル部
部長
荒木 清史

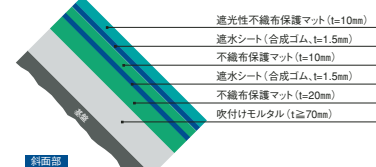
厚く堆積した粘土層の撤去が、最初の試練でした。そのまま施工すれば、完成後に地盤沈下を起こすおそれがあるため、岩盤が確認されるまで、厚さ25mにもおよんだ粘土をひたすら撤去。その総容量は、なんと94万m³にもなりました。また、粘性土遮水層施工時には、月のうち半分も降雨が続き、施工業者と顔をあわせれば再施工指示と工期挽回策の検討要請の繰り返しに…。実に、色々なことがありましたが、多くの方のご協力のお陰で、安全に絶対の自信を持つ設備が完成できたと感謝しています。今後も長年に渡り安心の維持管理を行えるように万全を尽くします。

遮水構造

●底面部では…
上層に遮水シート（厚さ1.5mm）、下層に粘性土遮水層（厚さ600mm、透水係数≦1×10⁻⁶cm/sec）を配し、異なる遮水方式を採用しています。これにより突起物による万が一の遮水シート貫通事故などでも遮水効果をしっかりと発揮できます。



●斜面部では…
遮水シート（厚さ1.5mm）を二重に配するとともに、上層シートの上に遮光性の不織布を敷設し、太陽光線による遮水シートの劣化を防止しています。



「中国における循環型社会の構築」を目標に環境に対する意識改革を進めたい…。そこで2003年に中国に現地法人を設立。工場建設、危険廃棄物経営許可取得、シアン取扱許可を取得し、2004年12月に竣工しました。しかし、中国での許可取得の道は、大変長く厳しいものでした。それでも環境保護設備の必要性を政府機関に訴え、同意を貰った時には「朋友」（友人）に…。現在のリサイクル対象は、電子廃棄物でIT産業の工場から発生するプリント基板やメッキ廃液ですが、今後は携帯電話やパソコンなどの電子機器まで拡大する方針です。



蘇州同和資源
総合利用有限公司
総経理
孫田 裕美・中央

めざましい経済発展を遂げる中国。現在、各種電化製品の製造・消費は増加し、世界中から原料となる物質が流入しています。しかし、中国国内の金属資源のリサイクル技術や排水、排ガス処理技術は充分ではなく、環境に配慮した資源リサイクルを実現するのは難しいのが現状です。同和鉱業は2004年12月、蘇州市蘇州高新区にリサイクル工場を完成させ、金属資源のリサイクルに対応しています。中国での本格的なリサイクル施設の稼働は、日系企業としては初めてのことで、工場は湿式プロセスによる金属リサイクル施設で、高度の排水・排ガス処理施設を備え、主に高品位基板、めっき廃液からの貴金属回収を行います。また、2005年秋には乾式プロセスが併設され、低品位基板からの金属リサイクルも可能となります。



中国金属リサイクル 湿式処理工場



日系企業初

技術の結晶



シュレッダーダストリサイクル設備

岡山蒸気リサイクル設備・OSRIは、2003年7月より本格的に設備検討を開始し、2005年1月の自動車リサイクル法施行に間に合わせるべく、昨年12月末に流動床炉焼却設備を完成させました。本設備は、既に先行して稼働していた小坂製錬KSR炉や、過去岡山工場で稼働していた流動焙焼炉の操業ノウハウを活かせるように設計しています。建設をプラントメーカー任せにするのではなく、同和鉱業がイニシアチブを取ることで、流動・燃焼制御、原料の安定定量供給システムなど、当社のオリジナル技術が盛り込まれた設備となっています。



岡山工場
リサイクル課
課長
岡田 美洋

使用済み自動車は、解体された後、様々な形で再生・再利用されていますが、重量比で約2割を占めるシュレッダーダスト(ASR)は、リサイクル困難物として、その大半が埋立処理されてきました。最終処理施設の逼迫などの状況を受け、ASR埋立量の低減と不法投棄の防止を目的とした「使用済み自動車の再資源化等に関する法律(通称：自動車リサイクル法)」が2005年1月より施行されました。同和鉱業は、2002年4月から小坂製錬においてASRのリサイクル施設を稼働させていますが、そこで培ったノウハウをもとに、2004年12月に岡山工場において金属と熱を回収するリサイクル施設を建設。当社独自のプロセスで、以下の特長を備えています。

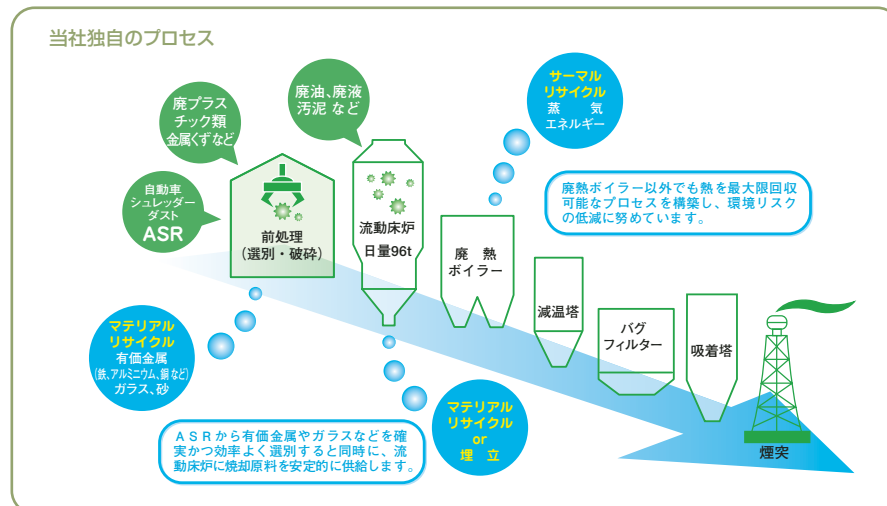
① ASR品質のばらつきに対応
 破碎、選別、焼却の各工程に最新の技術・設備が採用されており、ASR品質のばらつきなど、作業上の負荷を平準化し、安定した処理を行うことができます。

② サーマルリサイクルへの対応

焼却工程で発生する熱は、工場の熱源として利用するほか、場内の発電設備に供給し、100%のサーマルリサイクルを実現しています。

③ 環境対策

燃焼が安定する工程設計に加え、乾式・湿式を組み合わせた排ガス無害化処理方式を導入し、環境リスクの低減を図っています。



秋田レアメタル
製造部
部長 中村 謙・右

製造部 Inリサイクル課
副課長 小森 淳・左



近年、液晶、PDP需要が急増し、透明電極に使用されるITOターゲット材需要も拡大しています。これに伴いスクラップ材料が増加し、インジウムリサイクル回収ニーズは、ますます高まっています。同和鉱業グループではこのようなニーズに応えるべく、秋田レアメタルにおいてスクラップ材からのインジウム回収事業を、2003年4月より開始しています。その結果、開始後1年半でなんと5倍という急激な処理増になりました。今後もお客様からの増処理要請に対応できるように、日々現場の改善を進めていきます。



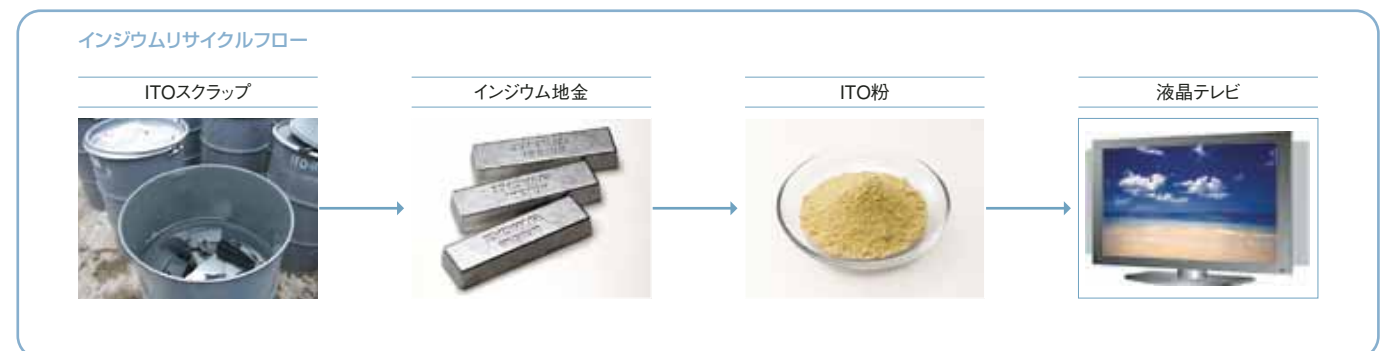
リサイクル NO.1

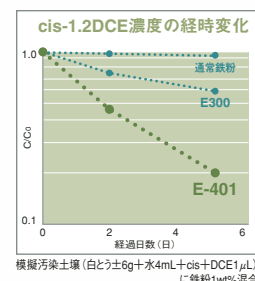
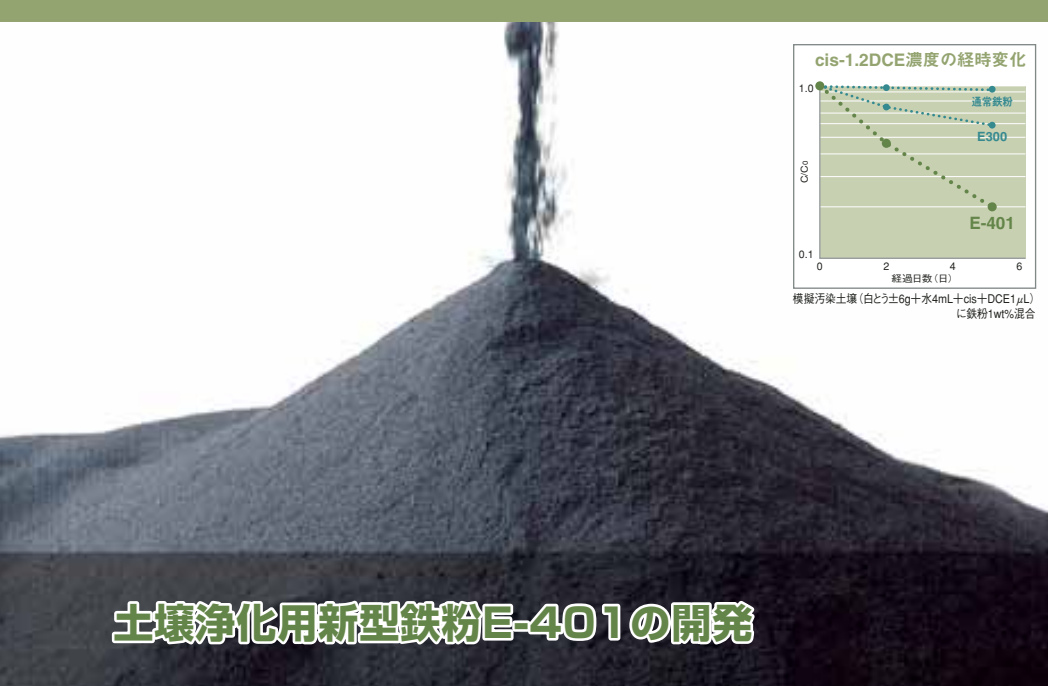
希少金属インジウムの回収強化

薄型テレビ、パソコン、デジタルカメラなど、私たちのまわりには液晶ディスプレイが数多く使われています。しかし、その原材料が不足しつつあることをご存知でしょうか？液晶ディスプレイの原料として重要なインジウムは、亜鉛を製錬する過程で産まれる微量副産物で、世界の亜鉛製錬所からの生産量は年間

300tほどです。リサイクルで流通する分を合わせても、500t程度しかありません。液晶には、インジウムすず酸化物(ITO: Indium Tin Oxide)という形で使われるのが一般的ですが、世界のITOの大半は日本で生産されて、日本で消費されています。日本のインジウム需給は、2004年予測で約

500tにもなり、今後、液晶パネルの大型化と増産が続けば絶対量の不足が懸念されます。同和鉱業は、2004年9月からITOのリサイクルを年間100t規模に増強し、希少な資源の循環と有効利用に貢献しています。





従来製品からの大幅な特性改善を…。この要求に応えるため、それまでの技術の延長線上でなく、制御要因および制御方法・条件、評価、製品としての性能を考え、基礎から試験を行いました。そのため様々なサンプル作製を試行錯誤。実に多くの時間を費やして、最終的な製法へとたどり着きました。大型案件に対応可能な生産を実現するため、多くの関係部署のご協力を得たことに心から感謝しています。



土壤浄化用新型鉄粉E-401の開発

目に見えない土壤の汚染、特に揮発性の有機化合物 (VOCs) による汚染は、汚染が移動しやすく、大規模な地下水汚染を生じやすいという問題があります。VOCsは分解処理が可能ですが、物質によっては、分解が遅いものがありました。当社では、2004年、改良を重ねた土壤浄化用鉄粉E-401を開発し、

安定した土壤処理を実現させました。E-401なら、僅かな混合量で、一般の鉄では分解困難なcis-1,2-ジクロロエチレン (c-DCE) やジクロロメタンといった物質でも素早く分解できます。この鉄粉法を用いて、地中で直接汚染源に混合するDIM工法 (Direct Iron Mixing) や、土壌内に設けた鉄粉壁で汚染

地下水を浄化するPRBTM (Permeable Reactive Barrier) などの導入により、汚染土壌を現地から運び出すことなく、土壌を浄化しています。



カドミレス黄銅棒の商品化

欧州RoHS (特定有害物質使用制限指令) をクリアするカドミレス材について、2004年の夏頃から自動車、家電業界から問い合わせが相次ぐようになりました。環境配慮型の合金としては、鉛レス材が先行していました。しかし2006年7月より施行される欧州RoHS指令に対応するため、「余裕をもって施行の

1年前には素材を切り替えたい」というユーザーの要請に応え、開発に着手。その結果、カドミレス黄銅棒「Dシリーズ (快削用のWとMタイプ、鍛造用のFタイプ)」の商品化に成功しました。

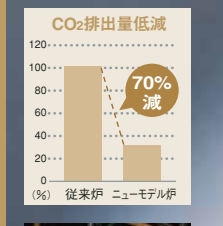
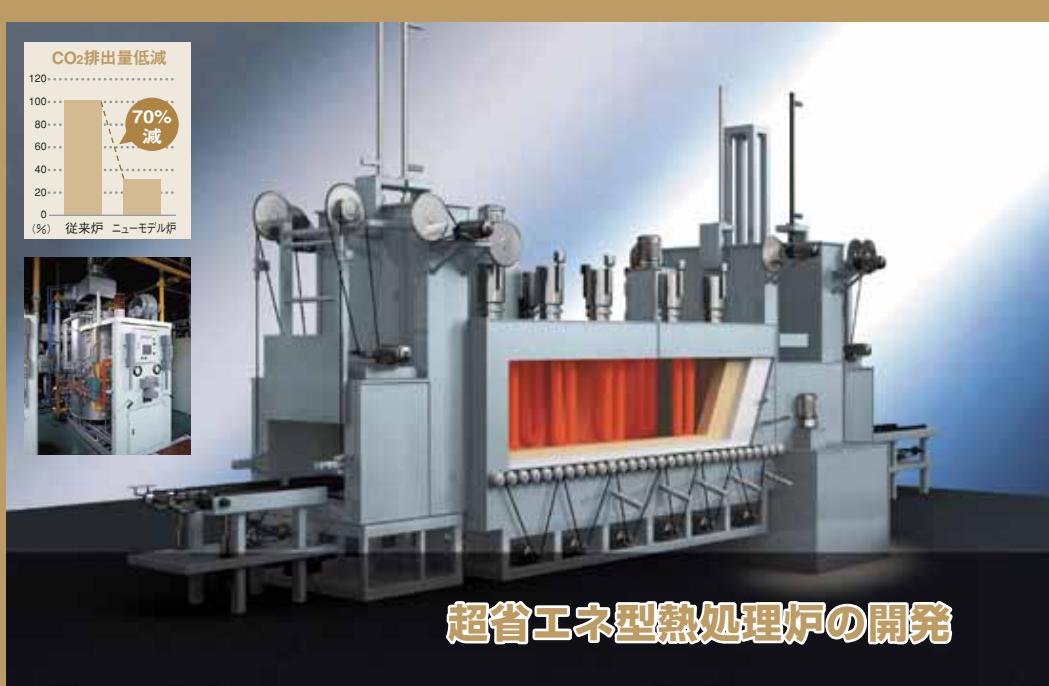
当初、カドミレス材の配合コストは、かなり割高でしたが、購入スクラップの中から、カドミウムをほとんど含まない原材料を選別。各原料と鑄造し、コストダウンを図りました。一方、識別管理も徹底させ、製造指示書に「カドミレス材」を明示。現物は識別容易なカラーロープで結束。製品端面に同色ペイントを塗付しています。さらにカドミウム分析は、ICP分析装置を使用し、ppmオーダーでの成分管理を行っています。



ガス加熱といえば「料理」や「風呂」。そんな私が、ガスのプロフェッショナルと打合せ…。一体どうなるんだ？というのが最初の思いでした。徐々に熱管理士のテキストを引っ張り出して勉強。分からないことはプロに質問し、何とかものにしました。現在、各工場はノートラブルで稼動しているということで、安堵しています。これが、地球温暖化ストップのひとつの答えになればと願っています。



地球環境保全に対する意識が高まる中、THTサーモカンパニーは、2004年度に環境にやさしい熱処理設備として超省エネ型連続式雰囲気加熱炉 (U-TGRT) と、リジエネバーナー加熱式吸熱型ガス変成炉 (SF-4000EN-RG) を開発しました。U-TGRTは、①高効率リジエネバーナーの採



超省エネ型熱処理炉の開発

用、②最適構造設計による急速均一加熱、③新断熱方式により画期的な省エネルギーを実現した地球環境にやさしい最新式の連続炉です。CO2の排出削減率約70% (従来炉比)、炉内リードタイムの短縮率約30% (従来炉比) を実現しました。SF-4000EN-RGは、加熱方式を電気か

らガスに変更し、さらに高効率のリジエネバーナーを採用した環境にやさしい吸熱型ガス変成炉です。吸熱型変成ガスコストとメンテナンスコストを低減することにより、大幅なトータルランニングコストの低減を実現しました。

環境関連のビジネス、特に我々のタッチする静脈的な部分は、非常に社会性が強い分野です。しかし、科学的な議論や情報伝達ができず、社会には不正確な情報が氾濫しています。そこで正確な情報の教育・発信を行うとともに、学問としても確立する必要性を私は痛感していました。社の仕事と大学助教授としての授業やセミナーの両立は大変ですが、教授・助手・研究員あるいは学科の先生方のご協力を得ながら何とか2年目に…。まさに大学は、情報の宝庫。この中で寄付講座がどのような実績を築いていけるかを課題に、今後も頑張り続けます。



東北大学環境科学研究科との包括的研究協力協定締結

2004年4月、同和鉱業は東北大学大学院環境科学研究科との間に、包括的研究協力協定を締結しました。環境科学に基礎をおいた総合的な分野について共同で研究を行い、基礎データ、科学的な知見を蓄積。社会への働きかけを行うとともに、交流を通じて、人材の育成を積極的に進め、より一層の社会貢献、産

業の発展に寄与します。今後は、組織的な協力のもとに技術討議、情報交換、研究課題の相互連携、研究者の派遣、受け入れ、設備の相互利用を行うとともに、幅広い課題の共同研究を進めます。また、教育面では同和鉱業から派遣された教員によって、実践的経験に基づいた研究指導と講義を開始しています。



座・談・会

DOWA Discussion meeting

DOWAにかける夢。

「非鉄業界＝男性社会」そんなイメージの業界ですが、同和鉱業を訪れると、女性たちの颯爽とした姿がとて目を惹きます。その中で、今回は環境ビジネスに携わる3人の女性たちが、主役です。座談会のホスト役は、代表取締役・COO 渡邊 謙一。彼女たちがイキイキと語る「未来のDOWA」に、しばらく耳を傾けてみてください。

THEME-1

「DOWA」のイメージは…

渡邊 いきなり難しい話題から入るのも堅苦しくなりますから、最初は皆さんが入社する以前の同和鉱業の印象から聞かせてください。

林 私が思っていた会社のイメージは、「鉱山とか、メタル製品を作っている会社」というもので、当社の環境ビジネスについては、あまり知りませんでした。

上田 私が学んでいたのは、大学の工学部で、理系の真面目な男子が多く、この会社もそうかなと思っていたら、やっぱりそうでした(笑)。

松本 歴史のある企業ですし、名前自体が固い感じがして、古い体制の企業なのかも?というイメージはありました。ただ固いとか、古臭いというのは、決して悪いことではなく「変わらない」だけの価値ある何かを継承しているのではないか、という期待を持っていました。

渡邊 なるほど。では入社されて、中から見た印象はどうですか?

松本 確かに古い部分はありますが、社長をはじめ、多くの社員が、つねに何か新しいことに、より良い方向に変えていくことに、とても積極的で、若手が発言できる機会も多く、うれしかったですね。

林 同和鉱業の誇りというか、特技は、他がやらないことをやることだと思います。「私たちがだからできること」に強くこだわっていますよね。例えば「鉱山技術を環境事業に応用する」その発想力がすごいと驚きました。

上田 そうですね。ジオテック事業部では、鉱石の中から有害金属をとっていた工程を、汚染土壌から有害金属を抽出する事業に応用しているのですが、いままでに自分たちが築いてきた独自の技術を、また違った発想で新しい事業に発展させている…。これは当社ならではのスタンスだと思います。

渡邊 確かに同和鉱業は、創業以来、一般の方には見えにくい事業領域でビジネスを展開しています。皆さんの入社前の感想は、そのまま一般の方が感じ

ていることに通じることだと思います。ただ、いま現場の最前線をリードする皆さんが、当社の特色をより深く理解し、仕事に強い熱意を抱いて臨んでいることをしっかりと感じ取れ、とても頼もしく思います。

THEME-2

いまの仕事と環境事業の関わりは…

渡邊 次は皆さんが、いま具体的にどのようなカタチで環境事業に関わっているのか。またその中で、何を感じているのかを聞かせてもらえますか。

松本 私は、以前、金銀銅などを生産する製錬の現場にいて、いまは資源・原料部にいます。最近、製錬の原料としてのリサイクル原料の割合は増えてきていて、当社の事業のベースとなっている製錬が、環境ビジネスの一翼を支えていることを実感しています。

上田 以前、環境技術研究所にいた頃は、土壌浄化材の評価や現場に提供する際の事前試験を行い、研究所・工場・営

業と連携を取りながら仕事をしています。現在は、ジオテック事業部の営業として、お客様を直接訪問し、様々な問題解決のお手伝いをしています。グループ内ですんなりと対応できる仕事もあれば、初めての経験になる難しい仕事もあります。後者の場合は、部内外部問わずに協力を求め、検討を重ねて提案することになります。その場合は、プロジェクトマネージャーとして、全体の動きを読み、検討し、提案書にまとめます。いままで無理だろうと思われてきたことを、自分たちの提案で解決できた時は、とても手応えを感じます。

林 私も上田さんと同じ、ジオテック事業部です。主に事業部の広報活動および海外営業の窓口として社内外を結ぶ仕事をしています。仕事を通していろいろな人と接することが多いので、国、会社、組織によって、環境の捉え方は様々であると気づかされます。環境ビジネスを世界に広めていくには、グローバルな視点を持つことはもちろんですが、個々の国に固有の考え方を大切にすろーカルな視点も忘れてはいけません。

渡邊 広い視野で仕事をするということは重要です。それぞれが与えられた従来の業務だけを進めていけば良いという受動的な考えではなく、自ら新しい問題を見つけ、解決していく能動的な考えで引続き挑んで欲しいですね。

THEME-3

今後の課題・そして会社を通じて達成したい夢…

渡邊 今後は、環境規制がますます厳しくなり、また企業としてのコンプライアンスや

透明性が厳しく問われる時代になっていくと予測されますが、皆さんはどう考えていますか?

松本 私も、これからは、資源の再利用、省エネなどに積極的に取り組めない企業は、社会から淘汰されてしまうと思います。これをサポートするのが私たちの役割ではないでしょうか。

渡邊 これは私の個人的な意見ですが、環境への意識が一段と高まる中で、今後は、バランスのとれた規制、資源の有効活用と経済合理性に合致したリサイクルの視点など、総合的な観点からの取り組みが絶対に必要になると思います。我々はそういった世の中の動きの中で、環境事業のリーディングカンパニーとして、また、希少資源の素材に関するエキスパートとして、トータルのリスクが最小限になる現実的な解決策を提案・主張していくことが大切です。

上田 私は当社の環境ビジネスについて、もっと情報を発信したら良いと思います。最終消費財を生産していないため、広告活動もあまり行っていませんが、今後は、事業者としての経験を広報・広告活動を通じ、発信してゆく責務があるのではないのでしょうか。

渡邊 環境事業に関する正しい情報を、社会に向けて広く発信していくことは、環境に対する問題意識、環境事業の必然性を社会に浸透させていく上でとても大切です。

松本 当社は、製錬、環境、電子材料、熱処理という4つの事業領域を持っているのですが、個々の事業のつながりが循環型産業の良い見本になればと思いますし、そういった事業領域を超えた何かをしたいと考えています。また、このような循環型事業のビジネスモデルを、顧客に提案していきたいと思っ

ています。

上田 私は、いまは土壌処理という切り口で、リスク低減に取り組んでいますが、将来は現在展開している事業以外の分野で、新規事業を立ち上げてみたいと思います。またその新規事業を含め、当社の産廃、土壌、リサイクルの各事業を効果的に組み合わせ「環境に最もやさしいトータルなリスク低減」を社会に提供していきたいです。

林 近年、最先端の技術が先進国以外の国で取り入れられています。例えば、地下鉄の切符ですが、先日出張で訪れた台湾では、そもそも捨てる切符が発生しないリユースシステム(テレホンカードのような切符を出るときに回収し、また切符自動販売機に戻すシステム)が採用されていて、びっくりしました。先進国の轍を踏まないように、寄り道をしない効率的な方法を、先進国以外の国が取り入れています。そういった意味では、日本が環境ビジネスで他国から学ぶことは多いと思います。私としては、このようなグローバルな動きを視野に入れて、自社の新しい環境ビジネスモデルを構築したいと思っています。

渡邊 そう、いま我々の環境事業は、国内のあらゆる産業はもちろん、世界各国のビジネスモデルを想定した上で、推進すべき時を迎えています。中国、東南アジアなどとの取引はさらに活発になっていくでしょうし、国際資源の循環を果たすために、我々はグローバルかつボーダーレスに活動を行う必要があります。それには、社員一人ひとりの高い問題意識と行動力を必要とします。皆さんの情熱が、同和鉱業の環境事業に、新しい扉を開くことを大いに期待していますよ。



代表取締役・COO
渡邊 謙一



エコビジネス&リサイクルカンパニー
ジオテック事業部 上田 愛



メタルズカンパニー
資源・原料部 松本 由佳



エコビジネス&リサイクルカンパニー
ジオテック事業部 林 裕子